

1 次の文章を読んで、後の問1～問4に答えよ。

明治時代。福井県では絹織物業が盛んで、ちよの家も家族で営んでいた。明治十九年に小学校令が公布され、満六歳以上は義務教育となったが、今年十三歳になるちよは、家業の手伝いのために学校にも通えないでいた。

清吉が、学齢に達した時、渡辺が進学を勧めに来なくても、父はためらいなく小学校に入学させた。父は、男には学問が必要だと思っているのだっ

(注1)

た。女は機^{はた}さえ織れば身が立つが、男は学問せねば世間に通らない。

義一郎は家業を清吉に継がせたいと思っていた。生糸の仕入れにしても、販路⁽⁷⁾に乗せるにしても、収支⁽⁷⁾をチヨウボにつけるにしても、無学では出来ない。

(注2)

ちよが男はけなるや、と唄^{うた}うのは単にけなるだけでなく、自分の意志を親に伝えたいためでもあった。やや、あてつけもあった。

清吉が学校へ通い出すと、渡辺がやって来た。

「どうや、みんな元気か」

(注3)

「はい、御院^{ごえん}さん。おかげさんでみんな変わりありません」

「清吉が、今年から学校でお世話になることになりました」

父も母も、御院さんには頭が上がない。

「仕事もうまいこといつてるようやないか」

「はい、どうやら」

「ところでちよちゃんとたまちゃんはいくつになる」

両親は、渡辺が何を言いに来たのかサツしたようであった。

「ちよは十三、たみは九つになります」

母は口ごもりながら言った。

「ほう、ちよちゃんはまだもう十三か」

母は、身を縮めた。

「前にも言うたが、小学校尋常科四年までは義務教育になったんやでの。十三にもなった子を学校に上げんのはようない」

「はい、すみませんことで」

「わしに謝ることではない。ちよがもつけねえ（可哀^{かわい}そう）とは思わんのか」

「仕事があんまり忙しいもんやで、ついあてにしてしてもて」

(注4)

「もうちよちゃんは、ぎょうさん働いてきた。学校へ通うたかて、手伝いは出来るやろ。仕事もキドウに乗ったようやし、女の子でも読み書きも出来んようでは、これからの世の中、嫁にも行かれんで」

渡辺は、教室の窓の外で、ちよが子守りをしながら地面に文字を書いていたことを思い出すと、不憫^{ふびん}でならなかった。当時よりも、女子の小学校の

(注5)

就学率は高くなっている。羽二重の生産が上がって、機屋は収益が上がっているのだ。明治二十九年に福井―敦賀^{つるが}間の北陸線が開通し、輸出港横浜との連絡が便利になり、製品及び原料生糸の輸送が順調になっていた。

「たみちゃんも、とうに学校へ入れんとあかん年やが、とにかく十三にもなった子をほっとくのは問題や。生産を落とさんようにみんなで工夫して、何とか学校へ来させなさい」

家庭内の事情にまで口出すことは行き過ぎであろうが、義一郎が転業に踏み切った時とは遙^{はる}かに経済的に余裕が出来てきている、と渡辺は見取つ

(注6)

(注7)

たようだった。こういう場合、小学校の訓導というよりは、住職として檀家^{だんか}の子弟をアン^んずる口調になっている。それだけに両親は痛み入って、軀^{からだ}が半分に折れる程頭を下げた。

B
その夜、家族会議が開かれた。

義一郎が農業をやめて機業に転業する時でさえ、家族で話し合いはなされなかった。父の一存で、誰も反対する余地などはなかった。ちよの進学については、家族一同の作業にかかわってくる問題である。仕事が順調に伸びているから、と渡辺は判断したが、順調に伸びているからこそ、その歯車の一つ一つが重要な意味を持っている。

「おっかさんはどう思う」

父は、まず祖母に聞いた。

「ちよだけやのうて、たみも学校へやることになるよ、下拵したしじりは誰がすることになるんやろう」

(注8)

祖母は、再び自分が管巻きすることになることを懸念けねんしていた。

「学校から帰ったら、島はたけも二飯の支度もするぞ。朝も、三時に起きて管巻きするぞ」

ちよは、必死の面持ちで言った。この機会をノガしては、進学はいつになるかわからない。

「わては、まだ学校へ行かんでもええわ。ねえちゃんが先や。わても、ねえちゃんの年まで家を手伝うぞ」

たみが口をはさんだ。

「二人いっぺんは無理やが、たみがもうしっかりしてきていますぞ、まずちよが先や。ほれから、たみや。おとっちゃん、御院さんが言うてなったよきに、十三にもなって学校へやらんのはやっぱ問題でっしゃろ。なんでも義務教育なんやでの」

母は、使い馴れぬ言葉を口にして、父を説得しようとした。

父も祖母も、沈黙していた。

油が乏しくなり、ランプの灯あかりが消えかかっていた。

渡辺がちよの進学をうながしに来たのは、ちょうど父が田植えの準備のために田おこしをした田んぼに水を入れ、土を平らにならすしろかきをしていた時であった。

渡辺にしてみれば、学齢に達した清吉は入学式の日から毎日通学しているのに、中村家では、十三歳になるちよも、九歳になるたみも入学は見送る

らしいと思い、これ以上放つてもおけずに来たのであろう。

授業は進んでいる。入学させるなら一日も早くと思っっているのである。

(注9)

菩提寺の御院さんの勧めとは言え、義一郎がはかばかしい返事をしなかったのは、機業を始めても中村家では家族の食べる分の米や野菜は自給自足をしているからで、機の仕事がふえる一方なのに、田んぼ仕事も忙しい時期にはいつていたのだ。

渡辺の来た日も、次の日も晩ごぜんのあと、家族は話し合いをした。

「ちよはもううちのためにぎょうさん働いてきたんやし、子供を学校へ行かしてやれんのはよっぽど困っている家やと思います。うちは機屋を始めて仕事が忙しいさけ人手がいるんで、貧乏しているちゅうわけではありません」

母が言った。

「おめえも、わても、学校へ行かんでも、なあも困ったことはなかったで。ほれより十三にもなつて今更清吉らと一年生ちゅうのは、肩身が狭うてもCのCい(可哀そう)と思うがの」

祖母はあくまで気がすすまぬ口調である。機織りさえ出来れば女は一人前と思っっているのだ。

「十三でも一年生は一年生やで、わては、清吉らと一緒にでもかまわんわ。今までより余計に働くさけ、行かしてくんねえの。みんなに迷惑はかけんつもりや」

ちよは、必死である。

清吉が学校から帰って来て、風呂敷包みから石板を取り出し、石筆で字を習っているのをちよはどんなに羨しく思っうらやましいていることか。今までは現実現実に目にしていなかったからそれほどではなかったが、六つも年下の清吉が字を書いているのを見ると、心おだやかではない。

(津村節子『絹扇』による。)

(注1) 機 —— 織物。

(注2) けなるや —— うらやましいなあ。

(注3) 御院さん —— 住職のこと。ここでは渡辺をさす。

(注4) ぎょうさん —— たくさん。

(注5) 羽二重 —— 絹織物の種類。

- (注6) 訓導——尋常小学校における教員の職の一つ。
- (注7) 檀家——一定の寺に属し、金品を寄進している家。
- (注8) 管巻き——織機の管によこ糸を巻きつけること。
- (注9) 菩提寺——先祖代々の墓を置き、葬式や法事を行う寺。

問1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) チョウボ

- ⑤ 兆
- ④ 徴
- ③ 張
- ② 調
- ① 帳

(エ) アンズ

- ⑤ 思
- ④ 慮
- ③ 暗
- ② 安
- ① 案

(イ) サツ

- ⑤ 察
- ④ 撮
- ③ 祭
- ② 擦
- ① 推

(オ) ノガシ

- ⑤ 放
- ④ 離
- ③ 失
- ② 逃
- ① 亡

(ウ) キドウ

- ⑤ 帰
- ④ 軌
- ③ 期
- ② 起
- ① 機

問2 傍線部A 母は口ごもりながら言った。 とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① まだ幼い子どもたちに過酷な労働をさせることについて、法律に触れてしまうと渡辺に指摘されるのを恐れていたから。
- ② 子どもたちの年齢について日ごろから意識したこともなかったため、突然渡辺に聞かれてとっさに思い出すことができなかったから。
- ③ 清吉の教育にばかり熱心な夫に対して不満を抱いており、渡辺にそのことを打ち明けてしまおうかどうかためらっているから。
- ④ ちよたちが学齢をとうに過ぎていくにもかかわらず、家の都合で学校に入学させていないことについて渡辺に指摘されると思ったから。
- ⑤ 労働力が必要な家の実情をあまり知りもしないくせに、子どもの教育に首をつっこむ渡辺を腹立たしく思っているから。

問3 傍線部B その夜、家族会議が開かれた。 とあるが、それまで父の一存で物事が決まってきたような家族で、話し合いがなされたのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 家族全員の意見としてちよの小学校入学を決めることにより、ちよの学校生活を応援してやりたいと思ったから。
- ② 父が自分の意見だけで家庭内の物事が決められていくことに、家族の者たちが不満を抱いていると気がき反省したから。
- ③ 父がちよを小学校に入学させることに反対であることを、自分一人の考えとして渡辺に話すだけの勇気がなかったから。
- ④ 機業に転業したときと違って世の中に民主主義が広まり、父が家長としての自分の意見を強制できない時代になったから。
- ⑤ 檀家である我が家を心配する渡辺の意見に従うべきだが、ちよたちの労働力が減ることは家族全体にかかわる問題であったから。

問4 傍線部C 祖母はあくまで気がすすまぬ口調である。 とあるが、ちよの進学に対する祖母の気持ちはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 自分たちは学校へ行かせてもらえず仕事一筋で生きてきたのに、ちよだけが学校へ行くことを不満に思っている。
- ② 十三歳になったちよが、入学して年下の同級生と一緒に学校に行くことをいやがっているのかわいそうだと思っている。
- ③ 女に学問は必要ないと考えており、ちよが学校へ行くことでさらに自分の仕事の負担が増えることを心配している。
- ④ ちよもようやく一人前に働けるようになったところで、せっかくなか覚えた機織りをやめてしまうことを残念に思っている。
- ⑤ ちよが同級生になることによって、清吉が周囲の者にかかわれ肩身の狭い思いをするのではないかと懸念している。

2

次の文章は詩人の大岡信おおおかまことが語ったものである。これを読んで、後の問1と問5に答えよ。

大岡―声をとおさなければ、どんな思想も生きてこないといっているくらいに、声というものは思想を肉体化するうえで重要性をもっている。そのことを日本人は意外なほど忘れてしまっていると思うのです。

昔、万葉集にあるような歌がうたわれていた時代のことばが、千年以上たったいまも、ぼくらの心を動かす力をもっています。それらは、文字として書かれたものではなく、肉声をとおして歌いつがれてきたものです。それが、ある時期に筆記された。

万葉集が筆記された万葉仮名というのは、ひらがなやカタカナが発明される以前に、漢字を表音文字のようにして使ったものです。中国人からみれば奇想天外のやり方で漢字を日本ふうに変じられたもので、それ自体には文学的な美しさも芸術的な美しさもない。ところが、その文字をとおして再現された歌は、時代を超えて現在のわれわれを動かす。しかも、ぼくたちは漢字かなまじり文(7)に翻訳されたものを活字印刷で読んでいくわけですから、当時の人びとは違うものを見ているわけですが、原作がもっていた力強さ、美しさ、論理性……などといった言語の本質はすべて伝わってきます。

とすると、万葉集の歌の基本とは、五七五七七というリズムをもったことば、言いかえると声として音として表現されたことばである、ということになります。けっして万葉仮名という文字ではなかった。そのことが学問研究が進むにつれて、ややもすると忘れがちになってきたように思います。学問研究の出発点は文字で書かれたものであると無意識に前提してしまう本末転倒(A)が起きてしまうからです。

いちばん最初にこの世に存在したのは人間の声、音だったのです。それが分節を形成し、分節が連なって言語をつくっていった。人間が蓄(4)えてきた声としての「原言語」といべき音が無数に存在していたからこそ、そのあとに言語の膨大な構造がつけられた。小学校や中学校の先生がたが、そのことを頭の片隅においておくかどうか、ことばの教育に大きな違いを生むように、ぼくは思うのです。

大岡―なにも、原始時代のことを現代にむりにあてはめようとしてこんな話をしていっているのではなく、現在ただいまの人間がことばを身につけていくときの問題としてこういえるのです。発声(B)されることばは、われわれの生いたちの問題として重要なのです。生まれ落ちた瞬間の人間は手足を動かせても、もをつかむことも、立ちあがることもできない存在です。これはほかの動物との大きな違いであり、人間の歴史がどんなに進化しても、生まれたばかりの赤ん坊がすつくと立ちあがって、「天上天下唯我独尊」なんてしゃべることはありえないですね。

地上におけるすべての人間は、白人も黒人も黄色人種も、これはすべて同条件であり、生まれたときはまったくの原始人なんです。それから何年間もか

かつて、さまざまな神経系が発達していくわけですが、知的な存在として一人前の人間になるには、現在では少なくとも二十年前後かかるのではないのでしょうか。人生の三分の一ちかい年月をかけて身につける、広い意味での「知識」は、どういう形で得られるのかというと、ほとんどがことばの習得を通じて得られていくのです。ことばは他者への伝達の手段というばかりでなく、考えるということそのものの土台にもなっているわけです。人間が人間となるためにはことばがなくてはならないのです。

そのことばの第一歩は、生まれたときのダーダーとかアーアーとかのことば——音です。それを基本として、一年ぐらいしてごくわずかな単語をしゃべりはじめ、そのうえに一つずつ一つずつ加わっていく。単語が加わり、単語をつなげることを覚え、他人へ意志を伝達するための論理性を把握し、くりかえし語りたくなるような美しい表現を求める……。そういうものが、一つずつ一つずつ、お城の石垣を積みあげるように構築されていく。

そういう意味でいうと、人類史における原始・古代の状態のことばから現代の状態までを人間は個体として経験する。生物学でいう「個体発生は系統発生をたどる」ということが、ことばの獲得についてもある意味ではあてはまるのです。これは、次の世代になっても、そのつぎの世代になってもつづくことでしょう。ですから、ことばのいちばんの基本となるのは原始的な状態におけることば、ことばを音として発声しはじめたところといえるのですが、このことについての理解が多くの人にあるかという点、かならずしもそうないようには思っています。

大岡——日本の詩論・歌論・俳論には、音読ということに重きを置いているものがたくさんあります。くりかえし、くりかえし、声を出して読むことがすぐれた詩歌を作ることに通じているということが強調されています。日本の古典時代の詩歌をつくっていた人びとにとって、音がことばの基本となるということは、自明の理であったと思います。平安末の大歌人で当時随一の理論家でもあった藤原俊成は、黙読ではなく、声に出して読め、くりかえし声に出して読め、すると、おのずともっとも適したことばづかいも得られるはずだ、と語っています。ことばを全身の行為としてとらえている。これは俊成が、式子内親王という彼女自身、当時のすぐれた歌人だった人から「いい歌とはなにか」と問われて、答えていることです。

ことばというのは生きものですから、つながりぐあいが悪いときには、ぎくしゃくして、ことばとことばが響きあわなくなってしまう。ことばは響きあうものでなければならぬということを知成は言っているわけです。文字に書かれているものをただ黙読すれば通じるという考え方はなかったのですね。

平安朝から鎌倉時代かまくらにさかんに行われた歌合うたあわせは、まさに声に出して詠ずることが勝負を決める重要なポイントでした。歌合というのは、いろいろな複雑な形式もありますが、何人もの同時代の代表的な歌人を左右二組に分けて、あらかじめ出されたいくつかの題、または即席の題について、両方の組から一人ずつ歌をつくって提出する。それを第三者のすぐれた歌人が優劣を判定する。あるいは左右の参会歌人が衆議で判定する。耳できくのが第一なので、歌をよみあげる人は、特別にいい声の人が選ばれていて、交互によみあげるのです。判定者（判者）はそれをじっと聞いていて、右側の勝ちとか左側の勝ちと

か引分け(持)とか判定を下す。ところが、優劣つけがたく、なかなか判定が下せないときがある。すると、両方で声を張りあげて競いあうわけです。

その場合、最低二回は歌いあげたのですが、二回とも同じ調子で歌ったとは、ぼくは考えません。最初はゆるやかに歌ったかもしれない、意味内容を相手に伝えようとして……。その歌が切迫した愛の表現をこめたものであれば、二度目はうんと変化をつけて、リズムを変えて歌ったことでしょう。そういうかたちでほかの人の判断にゆだねた。

一種の遊びにはちがいありませんが、同時にこれは戦いでもありました。歌人たちにとっては、ここで勝つか負けるかは場合によっては命がけのことです。有名な話ですが、歌合で負けて、それ以来、飯が食えなくなつて死んでしまったという歌人もいます。伝説ですが、壬生忠見と平兼盛が「恋」という題で競いあつた。

恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか(忠見)

忍ぶれど色にいでにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで(兼盛)

両方とも百人一首に載^(エ)っているほどの、甲乙つけがたい歌だったので、判定者が迷いに迷つた。その末に判定者はエイヤツと平兼盛の勝ちに決めてしまった。たまたま運が悪かつたのですが、壬生忠見はそれつきりガツクリとまいつて飯が食えなくなつて死んでしまった……。という話が、まことしやかに「沙石集」などの説話集に伝えられているくらいです。

近代歌人の若山牧水なども自作の歌をかならず朗々と歌つたそうです。それは朗詠術として完成されて、文字で見るとつまらない歌でも、牧水が歌うとよく聞こえたらしい。いまでも牧水門下には自分なりの朗詠術をもっているかたが多く、それを聞くと、ある程度、牧水の朗詠も想像できるように思うのですが、ぼくらはやっぱり悲しいかな近代人ですから、歌のなかに、まず意味を求めてしまう傾向がある。それにはそれで十分理由もあるわけですし、ぼくだって意味が希薄^(オ)で朗詠だけがりがりっぱだったら、かえつてがっかりしてしまうでしょう。しかし、ぼくは根本的には、歌は朗詠されていた時代のあり方が基本だと思っています。

詩もほんとうはそうなんです。現代詩も朗詠に耐えられなければならないと思う。ぼく自身は、長いあいだ、詩の朗詠というのはなんとなく照れくさくてしてこなかったし、朗詠に適さないような詩もあえて書きつづけてきた時期があります。でも、このごろは、朗詠できないような詩——できないということはありませんが、意味がいっぱいつまっついていて、一回きいただけではわからないような詩——を書いてきた時代をけつして無駄にはしないようなかた

ちで、なおかつ声に出して読んで、人の胸にすうつとはいつていくような詩を書きたいと思っています。

(大岡信『日本語の豊かな使い手になるために 読む、書く、話す、聞く』による。)

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9** ～ **13**。

- (ア) **9** 翻**訳**
- ① せいやく
② ばんやく
③ いやく
④ みようやく
⑤ ほんやく

- (イ) **10** 蓄**え**
- ① ふ(え)
② くわ(え)
③ たくわ(え)
④ たずさ(え)
⑤ とら(え)

- (ウ) **11** 競**い**
- ① きそ(い)
② あらそ(い)
③ たたか(い)
④ きよ(い)
⑤ ふる(い)

- (エ) **12** 載**って**
- ① こ(って)
② あ(って)
③ そ(って)
④ の(って)
⑤ まさ(って)

- (オ) **13** 希**薄**
- ① たんちよう
② きそく
③ きはく
④ たんぱく
⑤ きぼ

問2 傍線部A 本末転倒が起きてしまうからです とあるが、どのような「本末転倒が起き」るのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は 14。

- ① 一般に学問の出発点は文字で書かれたものであるにもかかわらず、万葉集は音声としての表現が優先的に研究されてきたということ。
- ② 万葉集の歌の研究においては、表意文字としての漢字以上に片仮名や平仮名が主な研究対象にされてきたということ。
- ③ 人間の音声を文字に置き換える苦心がややもすると忘れられて、音声と文字とが同時に存在しはじめたような錯覚に陥りがちであること。
- ④ 小学校や中学校では、ことばの成り立ちを解き明かすことよりも音声で表現することを中心にした学習が進められがちであること。
- ⑤ 万葉集の歌の基本は音声として表現されたことばであるにもかかわらず、書かれたものが重視されてしまう傾向にあること。

問3 傍線部B 発声されることばは、われわれの生いたちの問題として重要なのです。 とあるが、なぜ「生いたちの問題として重要」なのか。最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 他者とはじめてコミュニケーションをとる際には、書かれたことばよりも音としてのことばが有効であるから。
- ② 人間が人間になるためにはことばの習得が不可欠であり、そのはじまりは音として発声されたものであるから。
- ③ 生まれ落ちてすぐにもものをつかむことも、立ちあがることもできないのは、他の動物にはない人間だけの特徴であるから。
- ④ ことばを音声にすることによって、はじめて多くの人たちがその人の存在を認識してくれるようになるから。
- ⑤ 生後すぐに発する声は、ことばのようには聞こえないが、その後の言語活動を決定する要因となるから。

問 4 傍線部C 声を出して読むことがすぐれた詩歌を作ることに通じている とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 16。

- ① 古来、歌は声に出して読むものであったため、歌の評価はまず歌をよみあげる人の声のよしあしに左右されたから。
- ② 声を出して読むことで自ずとふさわしいことばが得られ、つながりも響きもよい表現となるから。
- ③ ことばをひとつひとつの単語に区切りながら声に出して読むことで、歌の内容を正確に把握することができるから。
- ④ 声を出して読むことが前提だった歌合のような場で切磋琢磨せつさたくますることにより、他人に評価される歌を作れるようになるから。
- ⑤ 他人の前で恥ずかしさを捨てて大声で歌を読むことが、一流の歌を作るための技術の向上につながっていくから。

問 5 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 近代詩人では、若山牧水のように詩を朗詠した人はまれであったが、牧水の朗詠術は引き継がれて、内容的にも優れた詩が多くなった。
- ② 歌合で歌をよみあげる人はなるべく同じ調子で読み上げて、歌のよしあしの判定に迷いが生じないように配慮していた。
- ③ 現代詩において、一度耳にただけで意味がわからないような言葉遣いの詩は、本質から外れたものであり一掃しなければならない。
- ④ 万葉集の歌は声に出すことを前提として歌いつがれてきたことばであるからこそ、千年以上たった今でも私たちの心に深い感動をもたらす。
- ⑤ 藤原俊成は「歌とは何か」と問われて、黙読しただけで正確に意味内容の伝わる歌を作ることが理想であると答えた。

3

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

ちかごろ、東の京に、をさなくよりとり娘をしたる者ありけり。平家の流れなりければ、源平の乱れの後は、ただ命の生けるばかりをいみじきことにて、世を渡ることなどいひしらずぞ侍りける。^(注1)
^(注2)

かかりけるほどに、前後相違の恨み、昔よりありけることなれば、このとり娘先立ちて身まかりにけり。その後さし続けてこのとり親また亡せぬ。^(注3)

五七日に当たれる早朝、^(注4)このとり娘の夫なりける者出でて来て、「今日、昔の人侍らましかば、いかばかり営み、たしなみ侍らまし。かまへて誦経物一つ、^(注5)

つかうまつらむとし侍るが、いかにもえ叶ひ侍らで、思ひあまり、これにても侍らんとて、これをなん持ちてまうで来たる。」とて、紙にひき包みたる物^(注6)

を取り出でて、さめざめと声も惜しまず泣きけり。このとり親の娘なる者、「何ならん。」と、さすがにゆかしくて、ひき開けて見れば、かの昔の人の、今^(注7)

はとて剃り下ろしたりける髪なりけり。これを見るに、いといたう悲しうて、忍びあへず泣きをりけり。昔のあり香もさすが面影ありて覚えて、二人の人、^(注8)

泣くよりほかのことなし。さて、「これは見んにつけてよしなし。ひき隠し給ひね。」とて、うつぶしうつぶしにけるとかや。^(注9)

『閑居友』による。

(注1) とり娘 —— 養女。

(注2) いひしらずぞ侍りける —— ことばに出して言い表せないほど貧しい状態でした。

(注3) とり親 —— 親として育ててくれた人。

(注4) 五七日 —— とり親が亡くなってから三十五日目に行われる遺族の供養。

(注5) たしなみ侍らまし —— 心を込めてつとめていただろうに。

(注6) 誦経物 —— 供養をしてもらうためのお布施。

(注7) これにても侍らん —— これでもお布施となりましょう。

(注8) とり親の娘なる者 —— とり親の娘。実の娘と考えられる。

(注9) 今はとて —— 臨終の際に。

(注10) あり香 —— しみ込んだ薫き物の匂い。

問1 傍線部A いみじきこと とあるが、具体的な意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 日常のこと
- ② 幸運なこと
- ③ 悲惨なこと
- ④ 苦しいこと
- ⑤ 悔しいこと

問2 傍線部B 昔の人 とあるが、具体的にだれを指すか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① とり娘の夫
- ② とり親の娘なる者
- ③ とり娘
- ④ とり親
- ⑤ 昔の高徳の僧

問3 傍線部C 思ひあまり、これにても侍らんとて、これをなん持ちてまうで来た とあるが、夫がこうしたのはなぜか。最も適当なものを、次の

- ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。
- ① 亡くなった妻なら、どんなに貧しくてもお布施を用意していただろうと思ひ、その気持ちにこたえたかったから。
- ② かつて亡くなったとり親から大変お世話になったので、なんとかしてお礼の気持ちを表したかったから。
- ③ 供養を頼む僧に以前からいろいろと仏道について教えをいただいていたので、感謝の気持ちを伝えたいから。
- ④ 今回は亡き妻とその親の供養までも僧にお願いするので、何も謝礼を払わないわけにはいかなかったから。
- ⑤ 大切な人を亡くし、不幸な生活に陥っている状況からなんとかして抜け出したいという気持ちが強かったから。

問4 傍線部D ひき隠し給ひね。とあるが、「とり親の娘なる者」はなぜ髪をしまうように言ったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 親の供養をお願いする「とり親の娘なる者」からすると、亡きとり娘の遺髪を僧への謝礼にするのは失礼だと思ったから。
- ② 亡きとり娘の人柄をしのぶよすがとなる遺髪を手放すことは、夫にも「とり親の娘なる者」にとつても辛かつたから。
- ③ 亡き父の遺髪を見てもけつして父は生き返ってはこないと思ひ、かえつて辛くなつてしまつたから。
- ④ 亡きとり娘自身の法要に用意するお布施として、その遺髪を僧に差し出すのはあまりにも気がひけるから。
- ⑤ とり娘が亡くなる直前に剃り落とした髪を手にするのは、とても不吉なことだと感じたから。

問5 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① とり娘の夫は、法要の席で亡きとり親の人情味あふれる人柄をいろいろと思ひ出して涙を流した。
- ② とり娘は貧しい境遇を脱し、平家の一族としての誇りを常にもつて潔い最期を迎えた。
- ③ とり娘は面倒を見てくれたとり親が亡くなったことにより、供養のために自ら出家した。
- ④ とり娘はとり親を大切に思つており、夫も亡きとり娘の思ひを受け継ごうとした。
- ⑤ とり娘と、とり親が同時に亡くなつたことで、夫と「とり親の娘なる者」はお互いの悲しみを理解して慰めあつた。

4

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。(設問の都合で返り点を省いたところがある。)

初魏遼東公翟黑子、有寵於太武奉使并州、受布千匹、事覺

黑子謀於著作郎高允曰、「主上問我、当以实告、为当諱之。」

允曰、「公帷幄寵臣、有罪首寔、庶或見原、不可三重、为欺罔也。」

中書侍郎崔鑿・公孫質曰、「若首寔、罪不可測、不如姑諱之。」

黑子怨允曰、「君奈何誘人就死地。」入見帝、不以实对。帝怒殺之。

(『小学』による。)

(注1) 魏遼東公翟黑子——魏(国名)の遼東(魏の地名)の公である翟黑子(人名)。

(注2) 太武——魏の第三代の君主(人名)。太武帝。

(注3) 奉使并州——并州(魏の地名)に使者となつて赴いたときに。

(注4) 布千匹——布は織物のこと。匹は単位。

(注5) 著作郎高允——著作郎(役職名)である高允(人名)。

(注6) 為——あるいはまた。

(注7) 諱——かくす。

(注8) 帷幄寵臣——機密の謀議に参与する臣下。

(注9) 首——自分で申し出る。

(注10) 欺 罔——いつわりごと。

(注11) 中書侍郎崔鑿・公孫質——中書侍郎(役職名)である崔鑿と公孫質(ともに人名)。

問1 傍線部A 事^{あら}覚 とあるが、何が「覚」われたのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 翟黒子が并州で不正な報酬を手にしたこと。
- ② 翟黒子が并州で過酷な税の取り立てをしたこと。
- ③ 翟黒子が同僚からねたまれるようになったこと。
- ④ 并州の人々が翟黒子をわなにかけようとしたこと。
- ⑤ 并州の人々が太武帝よりも翟黒子を支持していること。

問2 傍線部B 黒子謀^ま於^お著作郎高允 とあるが、黒子は高允に、どのようなことを相談したのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 并州の実情を太武帝に知らせるべきかどうかということ。
- ② 命がけで太武帝をいさめるべきかどうかということ。
- ③ 自分のしたことを太武帝に言うべきかどうかということ。
- ④ 家臣たちの不穏な動きを太武帝に伝えるべきかどうかということ。
- ⑤ 家臣の過ちの責任を取って辞職したいと太武帝に願い出るべきかどうかということ。

問3 傍線部C 不如姑諱之。は、「姑く之を諱まんには如かずと。」と読む。返り点のつけ方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 不_二如_一 姑_二諱_レ之。
- ② 不_三如_二 姑_二諱_レ之。
- ③ 不_レ如_二 姑_二諱_レ之。
- ④ 不_レ如_二 姑_二諱_レ之。
- ⑤ 不_下如_二 姑_二諱_レ之_上。

問4 傍線部D 君・E 人とは、それぞれだれを指すか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① D 高允 E 翟黑子
- ② D 太武帝 E 翟黑子
- ③ D 高允 E 太武帝
- ④ D 太武帝 E 崔鑿・公孫質
- ⑤ D 高允 E 崔鑿・公孫質

問5 傍線部F 帝怒殺之。とあるが、翟黑子が殺された原因を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 27。

- ① 高允の忠告に従って家臣の務めを果たそうと太武帝に意見したことで帝の機嫌を損ねたため。
- ② 崔鑿や公孫質の言うとおりの事実をかくして太武帝に接見したことで帝の不興を買ったため。
- ③ 高允に責められて気持ちの整理がつかないまま太武帝に面会して帝に暴言を吐いたため。
- ④ 太武帝にかくれて崔鑿や公孫質と密約を取り交わしたことが帝の知るところとなったため。
- ⑤ 崔鑿や公孫質を信用して太武帝に対する日ごろの不満を漏らしたことが帝の耳に入ったため。